

---

# たった一人の無能力者

不知火 螢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

たった一人の無能力者

### 【Nコード】

N7689X

### 【作者名】

不知火 螢

### 【あらすじ】

全国から特殊能力者を集め、教育する場。

離島丸々1個買い取り、作られた学園その名も『希望ヶ咲学園』

この学校な特別なところは三つ。

- 一つ。入学は3年に1度
- 一つ。入学のさい、一人だけ無能力者を招くこと
- 一つ。生徒は一度入学した場合死亡または卒業まで島から出てはならない

特別な生徒による、特別な生徒のための、特別な学園。

## A 1: 「招」

僕の名前は三奈優みなゆう中学校を卒業して今は休みの期間。  
正直言つて暇かな

ちなみに現在一人暮らし中。

家事とかは大変だけど…まあ大丈夫。

と、そんないつもと変わらないある日。  
ソレは起こつた

ピンポーン

「あ、はい！ちょっと待ってくださいーい！」

休みを満喫していたある日、チャイムが鳴つた。

出てみると…。

「あの…どちらさまでしょうか…」

扉の向こうには黒い帽子に黒いコート、黒いマスク…

と何でも黒づくしの人が立っていた。

「こんにちは」

「あ…はい。こんにちは」

「私、こういうものです。」

声からして男の人が一枚の名刺を渡してきた。

僕はそれを受け取つてみると。

『希望ヶ咲学園 間根木』

「ん？…この学校…どこかで…」

「はい。聞いたことはあるかも知れません…。」

「えっと…ちなみに…『あの』希望ヶ咲学園…ですよね？」

僕のそのちよつぴりおかしな質問にも間根木さんは答えてくれた。

「はい、『あの』希望ヶ咲学園です。」

「やっぱり…」

前に話題になった学園がある。

僕はそんなに興味がなかったんだけど、ある程度は知っている。何でも全国からある『特別な能力』を持った子供を集めて教育する学園があるとか…

しかもその学園は離島を丸々一つ買い取って建てたとか。

…あれ

「あの…ぼく何も不思議な力持っていないんですけど…」

僕はいたって普通の人間…

顔も頭も、運動神経も…背は普通より低いけど… ; ; )

「はい。そのことですが我々は3年に一度しか生徒を集めています…それはお知りですか？」

「そうなんですか…知りませんでした…」

「そうですか、では一人だけ無能力者の方を入学させる…というのも…」

「はい。知りません！」

心なしか、間根木さんの表情がしょぼんってなった気がする。

「……………では本題に入ります。」

「はい…。」

「今回の無能力者に…6万5千分の1の確率をくぐりぬけて、あなた…つまり三奈優さんが選ばれました。」

僕は

僕は一瞬

本当に

その言葉の意味が分らなかった。

「えー…とつまり…どうということですか…?」

僕のこの質問に間根木さんはすこしため息をついた。

「あなたに、入学のチャンスが来た…というわけです。」

「え」

「では…日時などはこの紙に…」

「ちよちよちよ！ちよっと待ってください！…」

差し出されたプリントを必死で押しもどす。

「…なにか？」

「よく、わかんないんですが…僕なんかが入学してもいいんですか？何も能力ないのに…」

「ははっ…なにをおっしゃるんです。あなたは選ばれたのですよ？それだけでも圧倒的豪運。常人にはたどり着くことができない境地。豪運…それも一つの能力では…？」

「はあ…」

「では。お待ちしております。」

そう言つて間根木さんは僕に一枚のプリントを渡してきた。

さっきよりやさしく渡されたのだったが、なぜか…  
なぜだがあの時の僕は断れなかった。

「…では。入学式にて。お大事に。」

「……………!？」

まさに、一瞬。

その言葉がこれほど似合う場面はそうそう無いと思う…

本当に一瞬で間根木さんは僕の目の前から『消えた』

「これが…能力…すごい…」

間根木さんの瞬間移動テレポートに驚いていると、さっき貰った紙のことを思い出した。

「えーっと…入学式はいつだろう…え」

僕は自分の目を疑った。

疑わずにはいられなかった。

「この日にちつて…明日じゃん…」

## A 2 : 「集」

4月26日

昨日の騒動から数十時間がたった。

冬の寒さがまだ残って肌寒い今日この頃

僕は今とある港に居る。

『希望ヶ咲学園』に行ける唯一の場所で、もちろん船は学園のものだけだ。

僕が港に来た理由は簡単。

昨日あの後間根木さんが忘れ物があったとかでまたやってきて僕に一枚の紙をくれた。

その中に集場所とか、いろいろ書かれてたんだ。

「うひゃー…人がいっぱいいるー…」

改めて周りを見てみると人がいっぱいいる…

ざっと見て200…くらい入るかな？

「えー…受付がまだの新生候補はこちらに来て受付を済ませてくださーい！」

そう言えば僕まだ受付してないんだっ！

これじゃあ失格になっちゃうよ

僕は人の海をかきわけ受付まで行った。

背が低い僕には丸で拷問だよ…

「ふー……やっと着いた」

「えっと…お名前は？」

「あ、三奈優です。」

「えーっと三奈さん…三奈さん……とあ、居た居た。」

ファイルを見ながら一人でブツブツ言ってるけどどうやら見つけられ

たようだ。

「あら…ふふ…そう。君が今年の……」

「え」

「がんばってね。」

「は、…はい。」

受付を済ませた僕は入学式が始まるのを待っていた  
「何だったんだろう…あの笑みは…」

### A 3 : 「組」

受付が終わって一人でぼーっとしていると誰かが生徒に呼びかけるのが聞こえてきた。

拡声器を使っているのかわからないけど、大きな声

『えー…マイクの子エックマイクの子エック…オツケー！よしっ！  
じゃあ生徒候補生、私の声が聞こえる場所まで来てくださーい！』  
もちろん僕も生徒候補生なので声が聞こえる場所まで行った。  
といつてもあんまり動いてないんだけど

背伸びしてみても声の主は一人の女性だった

『はい…オツケーだね！じゃあこれから入学試験の説明を始めます！』

「え？」

入学試験？

僕はその言葉を頭の中で何回も唱えた

「どうしよう…勉強なんてしてないよ…」

勉強していなかったことを僕はこれほど後悔したことはない…と思う。

「聞いてないよ！」「全員入学できるんじゃないのかよ！！」

僕以外にも試験があることを知らない生徒がたくさん居たみたいで皆文句を言っている。

「そ…そうだよ！」

僕が勇気を振り絞って言った瞬間

『五月蠅いなー…文句言う生徒のみんなは…帰えちゃってくださいーい！』

かわいらしく手をふりふりしながら言ってる。

言ってるけど！

「えっ…」

『どうぞどうぞ自由に…私たちは止めませーん！むしろ帰ってもらった方が私たちは楽でーす！ぶっっちゃけね！』  
ななななな

「この人…言ってることがめっちゃくちゃだ…」

もちろん、僕以外にも帰る生徒は一人もいなかった

『ありやりや…帰る人は居ないのか…まあいいや！じゃあこの私、  
映部弥子（うしべのやまこ）が試験の進行役を始めまーす。じゃあ皆……そうだなー…  
4人…いや、やっぱ3人…3人組作って！誰でもいいですよー』  
「そんないきなり…3人組って…」

此処で僕の性格が裏目に出ちゃった  
いや…

もともと表に出ることはないのだけれど…

人見知り を此処まで恨んだことはない…と思う。

などと僕が考えているといきなり肩をたたかれた

「わあっ！」

「おつとと…悪い」

振りかえると僕より背が高い…とても高い男の子が立っていた。

「え…えつと…」

「俺と一緒に組もうぜ！いやー…他の奴ら周りに居なくてさー！」

「おっ…」

「おっ？」

「おねがい！」

「ははは！もとより俺から頼んだしな！…俺の名前は明瀬誠（あかせまこと）よろしく頼むぜ！」

「う…うん！僕は三奈優よろしくね！」

「にしてもゆーは本当に高校生か？それともそう言う能力なのか！  
？」

「いや…残念ながら…高校生で無……高校生なんだ…」

無能力者…と言いそうになった時間根木さんがくれた紙の中に『他

の生徒に無能力者とばらさないこと』って書いてあったのを思い出して黙ってた。

「そうか…すまなかったぜ。まあいいや！もう一人探そうぜ！」

「そうだね…えーつとあの人とかどうかな？」

僕が指差した先には一人の女の子が立っていた

「んー…おお！可愛いじゃん！いいぜ行こう行こう！」

僕たちはその女の子のもとに走り寄った

女の子もどうやら気づいたみたいでこっちを向いてくれた

「なあなあ！相手居ないんなら俺らと一緒に組もうぜ！」

「あ、ちようどよかった！私もなかなか相手が見つからなくて困ってたんだ！」

「おお！よかった俺の名前は明瀬誠！よろしく頼むぜ！」

「ふふ元気だね。私は真空実央まそらみおよろしくね。明瀬君。」

「おう！」

「じゃあもう一人を探しに行きましょう！」

「え？もう3人そろってるぜ？」

「？…もしかして、もしかするとこの子？」

と、僕を指差して実央ちゃんは呟いた。

「う…うん。」

「あはは！ごめん。てっきり明瀬君の弟さんかと、よろしくね？」

えつと名前は

「あ、えつと三奈優」

「三奈君か よろしくね！」

「う…うんよろしく！」

「にしても三奈君…ちっちゃいね…」

僕を無降ろして実央ちゃんはそう言った。

「……ぼくってそんなにちっちゃいかな…」

どうしよう…涙が。

「でも私ちっちゃい子好きなんだよねー！」

「わっ！」

実央ちゃんがそう言ったとほとんど同時に僕は実央ちゃんに抱きつかれた

「ちよっ…ちよつと実央ちゃん…はなして」

こう見えても僕も高校生なわけで

こう見えても僕も男の子なわけで

女の子に抱きつかれちゃうと恥ずかしすぎる…

「あはは！可愛くてつい…でも三人組作って何やるんだろうっね」

「だよなー…まあまっときゃいつか！」

「だね」

大体5分くらいたった時

映部先生から3回目の放送が聞こえてきた

『だいたいできましたねー…うん！おっけー！じゃあこれから試験の説明をしまーす！』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7689x/>

---

たった一人の無能力者

2011年10月29日15時15分発行